

お布施再考と仕事の流儀

昨日 日本経済新聞(夕刊)コラム欄にお布施の目安 明示の動きと題して当院の取り組みも紹介していただきました。なぜお布施の明朗会計や料金の定額化はこれまでおざなりにされてきたのでしょうか。それは聖職者、出家者に対する施しだからだったと思います。しかしながら世俗化した今の日本の宗教界に聖性というものがどれだけあるのでしょうか。宗教者が世俗化すればお布施も世俗化するのが当然でありそこには何の矛盾もありません。世俗化とは料金の明確化です。値踏みはビジネスの世界ではとても重要です。これを適正料金と言っております。当院では対価としてのお布施 つまりサービス料金を提示することでこれまで信頼を得て護持発展をしてきました。それも安心価格と聖性のある僧侶に絞って紹介しております。世俗化してお坊さんとしての資質のない人は退職してもらっています。僧侶こそ厳選は必要です。なぜなら徳のない僧侶のお勤めではご利益がないからです。人々に感動を与えることができないからです。僧侶は本来ならどこからみても僧侶に見えないようでは僧侶ではありません。立ち居振る舞い 品格 教養は大事です。当院ではお布施の料金は最低これだけいただけたなら寺院が維持していけるだろうというところで設定しております。おそらく施主(消費者)には満足をいただけていると自負しております。そもそも完全に俗化した寺院がお布施だけで生活していこうなどと甘ったれです。世の中を舐めています。何様だと思っているのでしょうか。世の中の人たちの苦勞がわかっていない証拠です。私は檀信徒からのお布施や寄付などに頼って生きていこうなどとこれっぽっちも思っておりません。そんなみみっちい考えはとっくの昔に捨て切っています。僧侶として人として経営者としてあるべき生き方をしていこうと常に思っているので生活に困窮することはまったくありません。いつも仕事はあり収入はあり境内は人で溢れています。常時 職人(業者)が入っております。当たり前のことしかしておりません。朝のお勤めを毎日欠かさずしております。人の幸せを四六時中考えているだけです。自己研鑽を毎日毎日しているだけです。ですから悩みもありません。禪的に言えば人に悩みなどありません。悩んでいる自分に悩んでいるだけです。迷っている自分に迷っているだけです。すべては空であり無です。色即是空です。無我です。成り行きはすべて仏の正しい働きです。自分を写す鏡です。常にそこには答えがありま

す。お布施の料金を明示したくなかったら財布を持たなければよいだけのことで。経済活動はせずに純粋な宗教活動だけしていればよいのです。台湾の著名な高僧 海濤法師たちは財布を持たずにすべて信者たちからの寄進で生活しているそうです。自らの財産も家族も寺院も持たないそうです。一文無しで信者からのお布施だけで生活をしているそうです。そこには料金はありません。それがお布施です。私たち日本の僧侶がいただくお布施はお布施という名のサービス料金です。これには定額は自ずと必要にはなりません。ただそれだけのことで悩ましいものではありません。あくまでも理想的でいたいだけのわがままです。もっと正直になってもよいのではないのでしょうか。かの花園大学教授で日本を代表する仏教学者の佐々木閑先生もお布施の料金定額化には賛成しておられます。問題はそれにより日本の寺院や宗派が崩壊するというだけのことです。自信のない僧侶が生活ができなくなるということだけのことです。一般社会であれば至極当然のことなので何も心配することはありません。自然淘汰は世の習いです。むしろ健全化して優秀で真面目な僧侶が浮かばれてきます。若い僧侶の活躍の場が生まれてきます。改革が進みます。寺院の信頼回復に繋がります。こんな当たり前のことが何故ままならないのでしょうか。それは寺院社会が長老社会であり保守的封建制度に守られているからです。それに楔を打ち反旗を翻してきたのが不肖私です。寺院の制度はぶっ壊してきたのでこれからは人材の育成しかありません。スピーディに仕事をこなさない人から淘汰になると思います。即実行は重要なファクターです。当院ではそろそろそうした人材の入れ替えの時期に来ております。寺院特有のぬるま湯体質に浸かっている人ではなくて自立した人材の養成が急務となっております。お布施に頼る依存型人間ではなくそんなものはいらないよ、と。自分で何とかするから見てくれという人材が欲しいです。私も檀信徒にはそれを言ってきた人間です。その気になればどうにでもなります。お布施という隠れ蓑に浸潤して本来のあるべき姿 生き方を見失った今の宗門を立て直していくにはお布施の問題は避けて通れません。それを解決した当院は前進あるのみです。此処から一気に駆け上がって行きます。乞うご期待。

合掌
令和5年5月25日
見性院住職